

# 白門経友会



## 定期総会を終えて

毎年六月初旬に開催してきている白門経友会定期総会は今年で二十五回目となり、次のようなプログラムで実施し審議事項は滞りなく了承されました。

日時 平成二十七年六月十三日(土)  
午後二時 開会

場所 中央大学 多摩キャンパス

七号館 七〇四教室

### プログラム

- (一) 定期総会 午後二時～二時三十分
  - ① 平成二十六年 事業報告・決算報告
  - ② 平成二十七年 事業計画・予算案
  - ③ その他

### (二) 記念講演会

「アベノミクスと税財政改革」

講師 片桐正俊 教授

総会では、冒頭で谷口洋志会長の挨拶、引き続き、佐藤副幹事長より昨年度の事業報告・決算報告ならびに今年度の事業計画・事業予算について説明があり異議

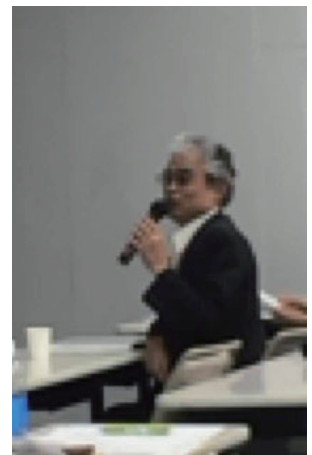
なく承認されました。

講演会では、片桐正俊教授により、まず、ご自分の研究内容に関連し、今回のテーマを選んだ動機・背景についてお話しがあり、引き続き、豊富な資料をもとにアベノミクスと税財政改革に関して詳細に解説していただきました。

講演会後は、例年同様に会場を「ふらっと」に移し懇親会を開催しました。今回は初めに本学の吹奏学部の金管楽器のグループにより生演奏があり、校歌も全員で合唱し、会場を盛り立てて懇親会を開始することができました。齊藤顧問の乾杯の音頭により懇親の場として会員相互の交流を活発に行い、田中右一常任幹事の締めめの挨拶で終了いたしました。今後は総会以外でも、学生を含めた交流の場を増やす所存です。会員各位におかれましては、幹事会等へのご参加とともに一層のご協力をお願い申し上げます。



## ～ 平成27年度 定期総会および懇親会の開催風景 ～



多摩キャンパス7号館 7104教室



ヒルトップ2F「ふらっと」



**たくさん行っただくさん享受する。**

二〇一〇年度卒 局 芳暁

【たくさん得るためには?】

当たり前のことを言うようですが、たくさん行えば行っただくさん得るようになるのが人生の真理です。人生を成功してきた偉人たちは決して天才ではないでしょう。現代の成功者たちも口を揃えて、「私は天才ではない。それ以上に努力した」という言葉を言っているように思えます。

しかし、気を付けなければならぬことは、努力の方向性ではないでしょうか。

「若いうちは遊んだらいい」なんて言葉が聞こえてくるようですが、決してそうではないと私は断言します。若いうちだからこそ、真剣にならなければならぬ。

「若さ」というのは特権です。それだけで語学も簡単に覚えられます。だから若いときにこそ真剣に考えよ、私はそう言って生活しています。

そして、夢企画に携わった学生には必ず将来のことを考えさせるようにしています。大

学は高校に比べると、学校との心の距離が遠い。私たちはそこを打開する策としても活動しているからです。

夢を語り合えたりする関係ってとても特別な関係ではないでしょうか。そんな世界観を作り続けているのです。

【たくさん行っただくさん享受する】

この活動をしていると神秘的な出会いがたくさん起こります。まさにその出会い求めていた!というような驚きの連続です。人は、そういった出会いに感謝しなければならぬなど感じる今日この頃です。後段で紹介する在校生との出会いもそうですが、逆に、人との出会いに感謝をできないと人として生きられないなども思うほどです。

とても哲学的な内容になってしまいましたが、例えば、私を感じるのには、私が生まれてきた確率から計算し、電車である人が横に座っている確率、同じ大学に入る確率、同じクラスになる確率まで計算に加えることとつ



もない確率になります。数々の奇跡の中に存在していて、数々の奇跡の中で出会いはあるのだと思います。私がこうして白門経友会に入ったのも、佐藤文博先生のゼミに入っていたなかつたらなかつたことだし、はたまた佐藤先生とフェイスブックで友達になつていなかったら実現しなかつたことでした。

こうやって人間と人間との関係というのはとてもとても神秘的に作られているのだと感じるので。

しかし人はこの神秘的な出会いを普通のものとして見ます。それを知らず、考えの次元が低くてそうなのです。だから随時このことを振り返らなければならぬし、たくさん学んで分かつて行なわなければならないのです。

人間じゃないものに生まれてきたなら、こんなこと感じたでしょうか。人間ほどコミュニケーションの方法が豊かな生き物はいないかと思えます。

地球上に住んでいる人間七十三億人が全て異なるよう存在だという事実も、考えてみればとても興味深い事実です。

**【最近の活動】**

最近まではOBOGとして在校生のインタビュー活動をしていました。夢企画は次の段階へ踏み出しました。これが本来やりたかった活動でもあるのですが、それは、在校生の夢の実現のお手伝い。以前にもお伝えしましたが、大学生は夢が無いわけではあ



りません。夢を叶えるきっかけがないのです。在校生と話してみるとやりたいことがたくさん出てきます。その中には、大人では全く考えつかないような奇抜な考えもあつて、少しそれを刺激してあげれば彼らは動き出すのです。現在、その中の2つが白門経友会のサポートの下に動き出しています。

**【経済学部のプロモーション映像】**

ある学生がこんなことを話してくれました。「学校の紹介映像を見たんですが、もう少し面白おかしくしたいと思うんです。高校生が見て話題になるような。」

皆様はご存知でしょうか。中央大学の紹介映像がインターネット上に上がっているのを。ご存知ない方もいらつしやるかと存じますが、学生にとっては何か気になったらインターネットで調べて、インターネットの動画を見て楽しむのが当たり前の世界となつています。そんな中央大学の学生の一人が、中央大学の面白いプロモーション映像を制作した



イエール大学

いというのです。私はこの話を聞いたとき、こんな大学を愛している学生がいるのかと正直驚き、私が学生のとき抱いていた大学への思いを反省しました。

彼が言うには、アメリカでは学生主導で制作した大学の紹介映像が多々あり、いずれもとても面白い内容になっているとのこと。私も言われて拝見したイエール大学の映像は、学生がミュージカル形式で大学のことを次々紹介していき、とても学生で作ったとは思えないクオリティでした。

そのような大学紹介を、経済学部、そして白門経友会の協力の下で始めようとしているのです。彼は、「経済学部で成功したらほかの学部にも広めたい、そうしたら大学がもっと楽しくなるはずだ」と言います。こんな素晴らしい考えが話を聞くまで埋もれていたのかと思うとまだまだ多くの、大学をよりよくする考えが在校生の中にくすぶっているのではないかと思ひ、今まで気づかなかつたことに恐ろしくもあり、これからが楽しみになる

のです。この企画の進捗状況は随時、この会報でお知らせできればと考えております。

【中央大学の芸術家を束ねる】

中央大学のOBOGには名だたる芸術家がたくさんいらつしやるのをご存知でしょうか。在学生の中には、大学にはいったきつかけが、好きな芸術家が中央大学の出身だからという理由の学生までいるほどです。

しかし勿体ないことに、そんな芸術家たちと大学では、そこまで親しい間柄にないのが現状です。例えば、著名な芸術家たちを大学に気軽にできたらどうでしょう？ きつと在学生も喜び、我々OBOGもその活動が楽しめるのではないのでしょうか。そんなことを実現しようとして動いている活動が次にご紹介した活動です。それは、中央大学関係者アーティストによるコンピレーションアルバムの制作です。

コンピレーションアルバムとは、よくプロのミュージシャンたちがあるコンセプトの下に作る一つのアルバムのことを意味しますが、これを中央大学の関係者で作ってしまうというのです。この企画著名な芸術家を巻き込めるのか疑問を抱くのではないのでしょうか。最初は当然巻き込めないでしょう。しかし、継続は力なり。次第に巻き込めるようになるかと確信しています。

それは何故か。過去に複数の芸術家たちが中央大学から旅立っていった、それはつまり、現在の在校生にも将来、著名な芸術家になる



可能性がある在校生がいるはず。この企画はそちらに主眼を置いています。

今回、白門経友会と佐藤文博先生のご協力の下に、中央大学内の録音スタジオも貸与頂けるとのことです。初めは微弱だが、終わりは壮大。そんな企画に仕上げていきたいと考えています。

【追伸・芸術と経済】

せっかくなのでここで芸術と経済について若輩者ながら考察させて頂きます。

私たちは大概、芸術を非常に高尚なものだと考えます。だからお金に縛られた芸術家を見ると、軽蔑するときもあるでしょう。それは、純粋な芸術への情熱ではなく金儲けの手段として利用された芸術には魂が込められていないだろうという判断からではないでしょうか。しかし、芸術は決してお金から自由ではありません。私たちがよく知っている純粋な芸術作品の中には、金銭的な動機から生まれたものが多いからです。ルネッサンス時代の優れた絵画のほとんどは、裕福なスポンサーが提供してくれたお金で描かれたことが事実としてあります。

もしレオナルド・ダ・ヴィンチがお金をも

らって肖像画を描いていなかったとしたら、「モナリザ」は存在しなかったかもしれませ

ん。しかし「考えの間」というある詩人の詩を

読むと、次のような内容が出てきます。

詩人はひたすら詩ばかりを考え

経済家はひたすら経済ばかりを考えるなら、この世は樂園になりそうだが、実際には

詩と経済の間を考える人がいなければ

ただ紙くずとなった

紙二枚が残るだけだ

もしかすると、この詩は芸術とお金の間で

現実的に苦しむ芸術家の立場をよく代弁して

くれているのかもしれない。

芸術家は常に貧しくあるべきで、霞を食

て生きろという法はありません。だから、数

多くの芸術家がお金を追求していることは事

実です。しかし、芸術はその味を失ってはな

らず、命の意味を表すべきだとある芸術家は

言いました。したがって、お金が割り込んで

芸術家の心を混濁させ、二次的であるべきお

金が芸術をする最も重要な目的になつては、

芸術の真の味を失うこととなります。真の価

値を回復する芸術をすれば、その価値はお金

に換算することができないだろうし、世の中

の富は当然ついてくるだろうと、芸術家のは

しくれとして考えています。(参考・芸術と

お金の間、芸術の真の味)

### 中央大学戦後七〇年に思う ——『百年史』をひもとく

今年の夏は戦後七〇年の総理大臣談話  
が議論を呼び、戦後七〇年が改めてク  
ローズアップされた。中央大学でも七  
月八日に戦後七〇年記念講演会「戦中・  
戦後の中央大学」(講演者・菅原彬州法  
学部名誉教授)が開催された。さらに、  
一〇月二日(水)には、戦後七〇年記  
念シンポジウム「戦争と中央大学」(一三  
時二〇分より、八号館八三〇七教室にて)  
が予定されている。

ことさら周年にとられる必要はない  
が、七〇年は人であろうと「古稀」にあた  
り中央大学では教員の定年退職の年でも  
ある。つまり、今年度末をもって教員は  
すべて戦後産まれということになるわけ  
だ。そこで、『中央大学百年史』(以下  
『百年史』)や『中央大学経済学部一〇〇  
年の歩み』(以下『歩み』)をひもとき、  
七〇年前の中大に思いをはせたい。

一九三七年に日中戦争が開始され、  
一九四一年にアジア・太平洋戦争へと戦  
線が拡大していく中で、総力戦体制が大  
学にまで及ぶ。一九四三年にはついに「学  
徒出陣」にまで至る。東京と近在の七七  
校の学徒が一〇月二日に、雨の降りし  
きる神宮外苑競技場を分列行進する壮行

会の映像は総力戦体制の悲劇を伝える一  
コマとしてしばしば取り上げられてい  
る。

その頃勤労動員中の予科学生(法)で  
あった藤江栄輔氏は、昭和一九年一二  
月、東京地方に珍しく大雪が降ったと  
き、夜明けの雪道を工場の仕事が終わっ  
て家に帰る途中、「そういう時間の中で  
突然噴き出したのは、あの『惜別の歌』  
の第三節、「悲しむなかれわが友よ」。あ  
のメロディーが突然噴き出した」。そし  
て一日でそれに曲を付けたのが「惜別の  
歌」だという(Hakunon ちゅうおん)  
二〇一〇年一二五周年記念号 p.18)。そ  
の歌は当時の学生達によって共感をもつ  
て受け入れられ、壮行会でよく歌われた  
という。その伝統を受け継ぎ、今日でも  
中央大学では卒業式で「惜別の歌」が歌  
われている。

さて、一九四五年二月二五日の東京大  
空襲などで東京は多くの建物が破壊され  
焼け野原になったと言われるが、「駿河  
台地域の建物と中央大学校舎は残存し、  
ニコライ堂を含む神田の景観は保たれ  
中央大学の戦後の復興に有利な条件が与  
えられていた」(『百年史』(下) p.153)。  
その年、九月一日に授業を再開。学  
徒動員で出征したが内地にとどまってい  
た復員学生、通年勤労動員で軍需工場に  
行っていた学生が、続々と復学してきた。

：(中略)：懐かしい教室は元のままで  
あった。黒ずんだ幅の狭い学生机と背凭  
れの無い腰掛けが並んだ教室に裸電球が  
下がっていた。知に飢えた学生はむさぼ  
るように講義を聴き、焼け残った書物を  
読んだ。暖房器具は兵器を製造するため  
に供出されて、教室には放熱器がなかつ  
た。冬になると教員も学生も外套を着た  
まま講義し、聴講した。(同書 pp.155-  
156)

「しかし期待された授業は休講が多く、  
とうてい満足と言える状態ではなかつ  
た。当時は物資が極端に不足していた。  
とくに食糧難はひどく、学生も教職員も  
まずは飢えをしのぐための買い出しに奔  
走せざるをえなかった。また東京のほと  
んどが戦災で灰燼に帰したため住宅難  
で、疎開先から帰郷できない教員も少な  
くなかった。」(『歩み』 p.158)

本会の元会長の小川明夫氏も、戦中戦  
後について次のように記している。「学  
業もロクにしないまま学部の二年になつ  
た時、徴兵延期がなくなり軍隊へ入隊し  
ましたが、一年九ヶ月の軍隊生活を経て  
敗戦。復員、復学ということで昭和二十  
年十月に大学へ戻ってきました。交通事  
情、食糧事情は想像もできないでしょう。  
米は配給、これだけでは足りないのので農  
家へ買出し、満員電車の中、折角農家で  
分けてもらった米は警察につかまり没収

されたりと、よくぞ過ごしてきたものと、  
時々思い出し、ぞっとするのです。かく  
して昭和二十二年九月に卒業し、生命保  
険会社に就職することができました。」(『歩  
み』 p.230)

そうした混乱の中でも、一九四五年九月  
には卒業証書交付がなされ、翌年四月には  
入学試験が実施された。  
一九四九年に私立学校法が制定され、中  
央大学は新制大学としての歩み始める。  
日々の生活だけでも大変であった戦後の混  
乱期にあっても学業を忘れなかった学生た  
ち、そしてその期待に応えようとした教職  
員たちの努力のおかげで、今日まで中央大  
学は一三〇年(経済学部は一〇年)途切  
れることなく続いてきた。そのことを私た  
ちはしっかりと心に刻み、これからも平和の  
ために貢献する大学であり続けるよう努力  
していきたい。

(濱岡剛 常任幹事)

2015年10月12日 第59号

発行 白門経友会常任幹事会  
編集 白門経友会編集委員会  
編集長 鈴木 秀男

〒192-0393  
東京都八王子市東中野 742-1  
中央大学経済学部内  
URL : www.wg-keiyukai.com  
Fax : 042-673-3425